

日本中國學會便り

The Sinological Society of Japan | Nippon Chugoku Gakkai

二〇一八年（平成三十年）四月三〇日
第一號（通卷第三十三号）



八大山人「安晚帖」水仙園（泉屋博古館蔵）

◆目録

- 卷頭言
- 二 第70回記念大会を迎えて
土田健次郎
- 四 東アジア近世儒教に関する二つの国際
会議
吾妻 重二
- 六 読むということ
川合 康三
- 八 第三回中国近現代文化研究会大会開催の
報告
木村 淳
- 一〇 国内学会消息（平成29年）
- 二二 委員会報告
- 二三 事務局より
- 二四 第70回大会開催のお知らせと研究発表の
募集

編集●神戸大学文学研究科 釜谷 武志
〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1
メールアドレス：kguwwz@lit.kobe-u.ac.jp
発行●日本中國學會
〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25 斯文会館内
ファックス：03-32251-4853
メールアドレス：info@nippon-chugoku-gakkai.org

第70回記念大会を迎えて

理事長
土田健次郎

今年の10月に本学会の第70回記念大会が東京大学で開かれます。第1回大会が上野の学士院で開催されたのが昭和24年(1949年)ですから、本学会は数えて70歳になるわけです。会員数は発足時の

7倍近くになっています。

第60回記念大会は京都大学で行われ、遑って第50回記念大会は早稲田大学でした。第50回の際は、開催のあれこれの仕事をしたので、今でもよく覚えています。この時は、第1日目には大隈講堂で、思想の方ではフランスからクリストファー・シペール国立高等研究院教授、文学の方では中国から裘錫圭北京大学教授を招いて記念講演をしていただき、それ以外の研究発表などは新築の14号館の大ホールをメインに行いました。大隈講堂は今では重要文化財に指定され、借りる時には学内料金でもかなりのお金が必要です。当時はめったに借りられませんでした。特別の大会だからとお願いして許可を得、しかも無料でした。14号館も開催が決まった時はまだ竣工していません。最初は大学本部が受け付けてくれなかったのですが、これも交渉の結果、特例として事前予約させても

らい、できたての建物を利用できました。会場にこだわったのは、歴史ある講堂と最新の建物で挙行するということで、伝統と革新の意味付けをしようと思ったわけです。ちょうどその時の学会の総会でも、新たな学会運営案が諮られました。この改革案がどのような過程で練られていったかは、この時に記念行事の一環として刊行された『日本中国学会五十年史』に詳しく書かれています。総会で改革案が提案されたところ激論が白熱し、どんどん懇親会の時間が押していき、焦った記憶があります。結局は関係者各位のご努力の結果、3年後に新体制が発足したわけです。この改革の要点は、次のようなものでした。

- 1, 地区制を改めて全国一区制を採用すること。
- 2, 役員選挙の投票制(評議員選挙)に委嘱制(理事委嘱)を導入すること。
- 3, 役員を理事(執行)と評議員(議決)に整理し、それらの定数を増やすこと。
- 4, 一部役員(理事長など)への職務集中を解消し各種委員会を整備すること。
- 5, 事務局(特に幹事)の負担を軽減させて合理化を図ること。

全国一区制とありますが、評議員選挙では各地区から必ず3名以上を入れる規定があり、地区からの声も届くようになっています。この中で画期的だったのは、委員会制の導入だったと思います。これにより学会の各事業に対して集中的に審議し運営できるようになり、またより多くの会員が運営にたずさわれるようになりました。最後の幹事の負担の軽減ですが、この改革前の平成元年から2年間幹事をした経験から言って、確かに前よりは軽くなったと思います。特に大きいのは、第50回大会から5年後に幹事のもとに補佐員が置かれるようになり、相応の手当を支給できるようになったことです。しかし従来は無かった各委員会との連絡や調整とか、官庁や各種団体から来るあれこれの書類の対応など新たな仕事も増え、幹事各位の犠牲的精神に支えられているのが実情です。今後は幹事をお願いするのがますます困難になると思われまので、更に工夫が必要だと思えます。

さて話をもどして第50回の際のことですが、記念大会

以外にも様々な記念事業がありました。先に触れた『五十年史』もそうですが、他に『日本中国学会創立五十年記念論文集』、『日本中国学会概要』が刊行されています。その中で300頁近い『五十年史』は貴重なお仕事だったとつくづく思います。案外学会の歴史というものはわからなくなっていくものです。それは学会事務局が頻繁に変わることに加え、創立当初に関わった方が物故されていくからで、現在となっては特にこの本の存在は貴重です。私は別の学会の事務局長をしていたことがあるのですが、その学会の創立当時のデータや、会則変更の記録が無いうえに、昔の事情をご存知の方も見つからず、ある手続きをする時に提出書類の必須項目が埋められないでたいへん困ったことがあります。

なお第60回記念大会のおりには『日本中国学会資料(一九九九年～二〇〇八年)』が刊行されました。ここには第50回大会以後の10年間の会員数の変遷、役員名簿、大会開催校、学会報編集担当校、学界展望担当校、学会賞受賞者・受賞論文、学会報掲載論文が載せられていて『五十年史』に接続できるようになっている上に、日本中国学会の沿革や『学会報』掲載論文のデータベースのCDも附せられていました。今回も初めはこのような冊子を出して以前のものと接続を図ろうとも思ったのですが、今は別のことを考えております。というのはこの10年間に本学会のホームページが格段に充実し、第60回以後の上記の資料のかなりの部分と創刊号以来の掲載論文は、ホームページで閲覧できるようになったからです。むしろホームページに創立以後の基礎情報を充実させていくという方が、今の時代にあっているのではないかと思います。たとえば平成14年以前の役員表、第59回以前の開催校一覧、沿革史の類を既にホームページに掲載されている部分につなげて、見やすい形でアップすることなどです。これらを見ることにより、本学会が一部の大学中心ではなく当初から名実ともに全国学会であったことがわかります。それに冊子体を配付しても年がたつうちにお持ちの方が減っていきます。『五十年史』も約20年前の発行ですので、その時以後会員になられた方は手元に無いはずで、それに対してホームページならば、

いつでもどなたもすぐに見られます。

『五十年史』を繙いたついでに記念行事小委員会の名簿を見たところ、第50回記念大会開催校代表は早稲田大学東洋哲学専修の福井文雅評議員と同大学中国文学専修の松浦友久評議員でした。御両所とも既に逝去されています。私はその下の実行部隊にいましたが、本学会と同年の私は、数えて五十歳だったわけです。そう思うと歳月の移り行きを感じます。

今年の第70回記念大会の開催準備校の東京大学は、外国から複数の研究者をお招きし講演していただく交渉をされているとのこと。今回はまた今回なりのご苦勞があると拝察しますが、楽しみにしております。またなんとと言っても大会で重要なのは会員諸氏の最新の研究成果の発表ですので、ふるってご応募ください。次世代シンポジウムもまた新たな展開があれば願っています。

おりしも来年から年号が変わることになっていきますが、本学会の歴史も三代の年号にわたることになります。年号というものはそれが始まる時にその名称をつけるために、実際の時代の様相と名称のイメージがそぐわないことがしばしばあります。戦国時代に天正という年号がありましたが、字面だけから見れば秩序正しい時代のものであっても、「天正十年」といえば思い出すのは本能寺の変です。また年号のイメージはその後の時代状況で変わります。つまり平成がどのような印象を持たれるようになるかは、平成が終わった後の時代次第で決まるということです。次の時代に日本が戦争に巻き込まれれば、平成は近代以後戦争の無かった日本にとって唯一の平和な時代ということになるでしょう。明治時代には日清、日露戦争、大正時代には第一次世界大戦、昭和時代には太平洋戦争がありました。逆に平成以後、今以上に平和な年月が続けば、平成は動乱の昭和から安定の時代への過渡期というようなイメージになるかもしれません。

学会にとって、平成の時代は、将来どのような印象を持たれるようになるでしょうか。今後斯学が隆盛になれば、そのための助走の時代だったと回顧されるかもしれませんが、ともかく平成の頃はまだよかったなどと言われるようにはなってほしくないものです。

東アジア近世儒教に関する 二つの国際会議

吾妻 重二
関西大学

昨年（2017）10月、上海で東アジア近世の儒教に関する国際会議が2つ連続して開催され、これに出席した。いずれも復旦大学の上海儒学院・哲学学院の主催によるもので、開催責任者は同大学の呉震教授である。近年の儒教研究の動向の一端を示す興味深い集会だったのでここに報告し、情報提供を行ないたい。

1 《家礼》在近世東亜的伝承と開展

一つ目の会議は『家礼』在近世東亜的伝承と開展である。10月13日（金）、復旦大学光華楼西主楼・哲学学院2401会議室で開かれた。

テーマとなった朱熹の『家礼』は近世東アジアに大きな影響を及ぼした冠婚喪祭の儀礼書であり、近年、大きな関心が集まっている。このテーマのもとで「東亜地域《朱子家礼》文献整理及其思想研究」課題論証会が開かれたのだが、ここで「東亜地域」とか「文献整理」と銘うたれているのにはわけがある。中国・朝鮮・日本・ベトナムにおける『家礼』関係文献を精選・整理し、標点本として中国から出版するプロジェクトのための作業

検討会という意味を持っていたからである。

そもそも呉震氏はこの出版のために上海市教育委員会に補助申請を行ない、「2017年度上海市教育委員会科研創新計画」の重点項目に見事採択された。全43件の申請のうち採択されたのはわずかに9件、さらにその中の4つの重点項目の1つに入ったのであって、この計画の卓越性が知られるというものである。

計画案によれば全8巻の叢書を出版する予定で、内訳は次のとおりである。

1. 日本江戸《家礼》文献滙編（漢文文献のみ）2巻
2. 越南《家礼》（漢文および字喃文献）1巻
3. 朝鮮時代《家礼》文献滙編（漢文文献のみ）4巻
4. 会議論文集《東亜文化交渉史的朱子“家礼学”》1巻

もちろん、これ以外にも中国の『家礼』関係文献を多数収載の予定だという。

会議には関連研究者・作業補助予定者合わせて20名ほどが出席した。呉震教授の趣旨説明に続き、筆者が日本における『家礼』関連文献について説明、さらに筆者とも親しい韓国・延世大学の張東宇教授が朝鮮時代の、湖南大学岳麓書院の殷慧副教授が中国の文献についてそれぞれ報告し、関西大学の佐藤ツイウエン講師がベトナムの文献に関して説明した。これらの人々が各国の文献の編集責任を負うことになる。

会議にはこの叢書を出版する上海古籍出版社・総編集の呂健氏による提案もあり、収載予定文献リストをふまえて活発な議論が交わされた。

この叢書の特色は何といっても「東アジア」という広域性であり、また資料を影印ではなく標点本で出版するという学術性である。全部で約400万字、2021年末に入稿し2023年に刊行する予定で、そのためにはテキスト入力、校勘および標点、解題執筆など相当の作業が必要になるが、諸方面の協力により乗り越えることができるであろう。

そもそもこの会議は、筆者の『家礼文献集成 日本篇』1～6（関西大学出版部、2010～2016年）および『朱子家礼と東アジアの文化交渉』（筆者および朴元在編、汲

古書院、2012年)の出版が大きな機縁となっている。「東アジア」ということでいえば、日本や朝鮮、ベトナムの儒者による『家礼』文献が中国で注目されているのが興味深く、本叢書出版のあかつきには「東アジアにおける儒教文化」の解明に大きな役割を果たすものと思われる。



“《家礼》在近世東亜的伝承与開展”のよう

2 回顧与展望：東亜儒学視域中的朱子学与陽明学

二つ目の会議は「回顧与展望：東亜儒学視域中的朱子学与陽明学」をテーマとして開催された東亜儒学工作坊(ワークショップ)国際学術研討会である。いま述べた『家礼』会議の翌日の10月14日および15日の2日間、復旦大学光華楼西主楼・哲学学院2301会議室で開かれた。

プログラムとしては、初日が開会式のあとセッション1と2および総合討論があり、昼食をはさんでセッション3～5が開かれた。二日目はセッション6～9が開かれ、最後に円卓座談会「儒学在東亜」与「日本底儒学」、「韓国底儒学」および閉会式が行なわれた。

中国からは呉震教授以下、陳立勝(中山大學)、錢明(浙江省社会科学院)、張衛紅(中山大學)、郭曉東(復旦大學)、張子立(同)、李紅軍(延邊大學)、高海波(清華大學)、劉增光(中國人民大學)、陳毅立(同濟大學)、洪軍(中國社会科学院)、張天傑(杭州師範大學)の諸氏が発表した。

台湾からは田世民(台灣大學)、林月恵(台灣中央研究院)、張崑將(台灣師範大學)、蔡家和(東海大學)、陳佳銘(中正大學)の諸氏が、韓国からは金世貞(忠南大學)、高在錫(成均館大學)、シンガポールからは魏月萍(南洋理工大學)といった方々がそれぞれ発表した。

日本からは飯田泰三(法政大學)、三浦秀一(東北大

學)、緒形康(神戸大學)、佐藤ツイウェン(関西大學)および筆者が発表した。

このように、発表者25名、オブザーバーとして中国の院生や日本人留学生など若手十数名も参加し、たいへん活気あふれる会議となった。

この国際会議は「回顧与展望」のテーマが示すように、これまでの先行研究を回顧し、今後を展望するという点に一つの特色がある。したがって研究書の書評も多く含まれていた。これは面白い工夫であって、中国や韓国、日本そして東南アジアの近世儒教についてどのような研究書・論文があったのか。その研究動向を知る貴重な情報交換の場になり、きわめて有益であった。日本については三浦秀一教授と筆者が発表した。ただし日本の研究についてはもっと紹介者がほしいところであった。儒教について多く発言を残した丸山真男に関しては緒形康教授と飯田泰三教授が発表した。

もう一つの特色としては、中国の儒教のみならず、朝鮮や日本、ベトナムなど東南アジアの儒教が対象として取り上げられたこと、また、時代も近世のみならず近代・現代の状況が論じられたことが挙げられる。「東アジアと儒教」、「近現代と儒教・漢学」という視点はいずれも近年の新しい動向として注意しなければならないであろう。

なお、今回の2つの国際会議を主催した上海儒学院は2016年9月、呉震教授を中心に復旦大学内に設けられた組織で、同月3日の成立大会には本学会の土田理事長も参加しておられる。今後、儒教文化研究のハブとしてその活動が注目されることである。詳細はそのホームページを参照されたい。



“回顧与展望：東亜儒学視域中的朱子学与陽明学”記念写真

読むということ

川合 康三

國學院大學

「ふだん思っていること」を書くようにという御下命を、研究推進・国際交流委員会の宇佐美文理委員長と出版委員会の釜谷武志委員長からいただいた。昨今の研究動向に対する感想を求められたのだと思う。

そうだとすれば、お二人は今の世にあふれている論考に必ずしも満足しておられないのだろうか。たまたま届いた『東方学』135輯の「編輯後記」に、宇佐美さん御自身が柔らかな筆致で書かれていることも、論文というものは知的な発見を得た喜びから出発すべきだという趣旨とお見受けした。さらに勝手に付度すれば、投稿論文の多くにはそれが希薄ではないかという微意を含んでいるのかも知れない。

考えてみれば、論文や著作は毎年大量に生産され続けているけれども、宇佐美氏の文章のように研究のありかたそのものに対する意見はあまり目にすることがない。わたしも改めて書いたことはないけれども、三年ほど前、ポストンに滞在していた時期、南京大学の下東坡さんと何回か会っておしゃべりしていたら、知らぬ間に下さんはそれを対談のかたちにとまとめて発表してくださった（『探尋詩何以為詩—川合康三教授訪談録』、林宗正・蔣寅編『川合康三

教授栄休紀年文集』、鳳凰出版社、二〇一七、所収）。それはもっぱらわたし自身の関心の所在を語ったものであって、世の研究動向に対する意見ではないし、他人にどれほど参考になるかもわからないが、しかし個別の研究論文とは別に、研究の姿勢とか方法とかに関わる言説は、日本でももっと盛んに行われていいのではないか。そう考えて、与えられたこの機会に「ふだん思っていること」を書かせていただく。

中国古典文学の勉強を始めたころ、いつも胸に去来していたのは、結局自分のしているのは人の書いたものを後ろから追いかけているに過ぎないのではないか、という思いだった。時には「巻を開いて読み且つ想えば、千載も相二期するが若し」（韓愈「出門」）というような、古人との出会いの喜びもないではなかったが、読んでいる対象が「古人の糟粕」であることは動かない。つまり昔の作者が自分や周囲の世界をどのように捉えたか、その感性や思考の足跡を言葉をたよりにたどっているだけだ、茫漠とした全体のなかから自分が見出したものではなくて、人の描いた見取り図に導かれているだけのことだ——読むことがそういうものだとすると、それは作者に追従する二次的な行為にとどまることになる。

作者のあとを追いかける読む行為とはまったく違って、書くことはこの世に新たなものを創り出す営為なのだという信奉、ないしは羨望があった。中国の詩の場合も、「用例」のある語を韻律の規則に合わせて並べたものではない、作者の感情、想念そして思想によって組み立てただけではない、「筆を下せば神有るが如し」、作者を越えた「神」が乗り移ってはじめて生まれるのが作品であると信じていた（今もこの信念は変わらない）。読むことと創ることの間には、いかんともしがたい隔りがあると思っていた。

さらに「千載も相二期するが若し」、古人の書いたものを読んで「古人と友となった」と思うことになかにも問題がある。読んで共感する、琴線に触れたと思うのは、実は自分のなかにすでに存在していた思いと一致したというに過ぎないのではないか。とすると、本のなかに自分自身の影を読み取っているだけのことになる。自分という小さな存在を

手立てに古人の書物のなかを照らしてみても、たまたま光が返ってきた部分を我が意を得たりと思ひ込むのは、本のなかに自分を読んでいる、卑小な自分に見合った部分を照らし出して喜んでいるようなものかもしれない。このように考えてみると、読むという行為はまるでつまらないものになってしまう。読む行為がかくもつまらないものであるならば、読むことをもとにした研究がつまらないのも当然のことだ。

しかし本を読むことは、自分の尺度に合う所を汲み取ることではない。自分の知識、経験、思念、それでは捉えきれないものに触れ、打ちのめされるほどに自分が動揺させられる、つまりは自分を越えるものとのぶつかり合いのはずなのだ。それでこそ読書は自分の真の「経験」となる。振り返ってみれば、十代のころ、読み終わると周囲が輪郭を失って呆然とした状態になり、自分が読む前の自分と変わったような気がする、そんな本との出会いが何回もあった。ところが大学に入って「勉強」として本を読むようになると、いつの間にか「ためにする読書」に変わってしまった。読書本来の恐れと喜びを取り戻したいと思うのは、遅きに過ぎるだろうか。年齢だけが問題なのではない。読むことを職業とする身としては、いつ訪れるかわからない本の衝撃を待つばかりはいられない。読むだけではなく、読んだことを書かなければならない。読むことが身過ぎ世過ぎのなりわいになると、読書の本質から離れてしまいがちになる。

本を読むことによって触発され、自分のなかのぼんやりしていたものがはっきり形をあらわすということもある。本は触媒だと言った人がいるけれど、それはそういう意味なのだろう。同一の物質ではない本と自分との間に化学変化が起こって、別の新たなものが生み出される。そうすると、読むことは単に自分の影を読み取ることより、積極的な意味をもつ。

しかし、自分のなかに元々あったものを見つけるにしても、触発されて自分のなかに新たなものが生み出されるにしても、いずれの場合も、本が読み手に与える作用であるにとどまる。そうした受け身の読み方を越えた、もっと能動的な読み方こそ、わたしたちは目指すべきではないか。本から受け取るのではなく、本に与える読み方である。読む

ことによって作品を新たによみがえらせる、新たに創り出すという読み方。再創造の行為としての読むことが可能になれば、読むことは決して古人のあとを追いかけるだけではないし、先に記した「読むことと創ることの間には越えられない逕庭がある」という思い込みも払拭される。読むことは創ること——読む行為をそのように捉えたら、作者という存在はバルトが言うとおりの作品の支配者ではなくなる。読み手は作者の意図を越えて読み解いていくことになる。そして作品はエーコの言うように読者に向かって開かれたものとなる。読み手はあらかじめ決められた読み方から離れて、作品を自在に展開することになる。

とはいえ、中国古典文学を対象として、そうした創造的な読みを提示してくれる著述は決して多くない。中国の文学のあまりにも強固な伝統の呪縛は、読む行為に対しても我々をなかなか解放してくれないかのようだ。むしろ中国以外の分野で繰り広げられている読みの実践のなかに、刺激的な言説を見ることができるとは。最近では野崎嶺氏の著作のなかに、わたしは読むことのおもしろさ、すごさを教えられている。ずっと前から翻訳の『ネルヴァル全集』を備えながら入り込めずにいるので、『異邦の香り—ネルヴァル『東方紀行』論』についてはなんとも言えないけれども、谷崎潤一郎や井伏鱒二は自分でも大半は全集で読んだはずなのに、自分が把握したと思っていたのはまるで異なる読解が展開されているのに興奮せざるを得ない。そして中国古典文学に関しても、こんな読み方ができたらと思わざるを得ない。

長い歴史の蓄積をもつ中国学の場合、広く深い学識がまず求められる。文献の操作においては、厳密な手続きが方法として確立されている。これは中国の学問の貴重な財産であって、今日の学術文化のなかにおいても価値ある遺産として尊崇を受けているといえよう。しかしそのなかに安住しているだけでは、今の文学として認められることはむずかしい。実際、中国古典文学は文学を語る枠のなかに入れてもらえないのだ。今日、また将来にわたって、生氣あふれた豊饒な文学として人々の間で生き続けるためには、我々の新たな読みが求められる。そして中国古典文学の作品は十分それが可能な内容を含んでいるはずなのだ。

第三回 中国近現代文化研究会大会 開催の報告

木村 淳
大妻女子大学非常勤講師

2017年9月2日(土)・3日(日)、第三回中国近現代文化研究会大会を開催した。本会は1996年に発足以来、約2ヶ月に一度の例会を活動の中心とし、大会はこれまでに2009年、2013年に開催した。

今回は著名な近代の漢学者・書画家である長尾雨山(1864-1942 名は甲、通称楨太郎)をテーマとして、2日はコレクション展「長尾雨山の見た中国書画」開催中であつた大阪市立美術館において会員各自の研究発表及びシンポジウム「長尾雨山と近代中国」を行い、3日は京都市内においてエクスカーション「長尾雨山ゆかりの地をめぐる」を行った。2日は51名、3日は25名の参加者があり、会員が10数名程度の研究会としては多くの方々に足を運んでいただいたと思われる。

2日午前はず会員4名の研究発表である。安生成美氏(茨城県立八千代高校)「近代における博文著録の展開」は、漢代の墓室・建築用資材に見える銘文である博文の著録過程について考察し、乾隆期以降の金石書に博文の独立した項目が設けられ、図版と考証を加えた記載が見られるようになったこと、博文の専著編纂に清代中

期に活躍した張廷済が大きな役割を果たしたことを明らかにした。下田章平氏(茨城県立水戸第二高校)「ナメタツ事件と日本の書画収蔵界」は、中国書画の鑑賞家・収蔵家・仲買人としての滑川澹如の活動を明らかにし、滑川が起こした大正期の書画売買にまつわる事件である「ナメタツ事件」を関東の中国書画収蔵界凋落の先蹤として位置付けた。草津祐介氏(都留文科大学非常勤講師)「中華人民共和国建国期の文字教育—『小学校語文課程暫行標準(草案)』『小学校語文教学大綱(草案)』の写字教育に関する記述を中心に—」は、近現代中国における写字書法教育史の構築を目的とするもので、中華人民共和国建国期の小学校における写字教育が字源に溯らず字形に基づき字音・字義を教えるという性質であつたことを論証した。近藤光雄氏(大妻女子大学・獨協大学非常勤講師)「巴金における自己犠牲の倫理」は、小説『滅亡』をもとに、巴金がグイヨーの倫理道徳や暗殺者の苦悩を積極的に受容しながらも、自己犠牲をめぐる個人の内面に迫ることができなかつたという自己犠牲倫理に対する巴金の認識の限界を指摘した。続いて研究発表の後、弓野隆之氏(大阪市立美術館)よりコレクション展「長尾雨山の見た中国書画」の解説があり、展示品への理解と雨山の活動に対する認識を深めることができた。

昼の休憩時間内には、同会場内で行われていた2件のポスター発表に関して発表者が参加者の質問に答える時間が設けられた。土屋明美氏(国士舘大学非常勤講師)「中国近現代の書法家研究—『中華民国三十六年中国美術年鑑』を中心に—」は、当該年鑑の諸本を比較し2008年に上海社会科学院から刊行された翻印本の改変に問題があることを指摘した。さらに当該年鑑における書法家の伝記の分類、内容、項目を整理することで、当時の「書法家観」を解明していくための今後の展望を述べた。菅野智明氏(筑波大学)「近代東アジア〈書壇〉形成論の構想」は、氏を代表者とする研究課題「近代東アジアにおける「書壇」形成の地域比較研究」(日本學術振興会 科学研究費補助金基盤研究(B) 課題番号17H02291)の概要を示した。当該研究は、金貴粉氏(大阪経済法科大学)、高橋利郎氏(大東文化大学)、高橋佑太氏(安田

女子大学)、矢野千載氏(盛岡大学)を研究分担者、下田章平氏を研究協力者とし、日本・朝鮮・中国における近代の書壇の見取り図の提示を試みることにより、「美術」概念の導入で揺らぐ近代の書の美術史的位置付けや社会的役割を再考するための新しい視点の提供を目指すものである。

2日午後はシンポジウム「長尾雨山と近代中国」である。まず西上実氏(京都国立博物館名誉館員)による基調講演「漢学者長尾雨山の活躍」が行われ、続いて登壇者による提言がなされた。基調講演では、西上氏が長尾雨山関連資料を整理する中で得られた知見の一端が披瀝され、新たに発掘された資料をもとに富岡謙蔵、犬養毅、上野理一、阿部房次郎等との大正期における交流を中心に雨山が果たした功績が述べられた。次に2名の登壇者が提言を行った。松村茂樹氏(大妻女子大学)「長尾雨山の文化的・社会的貢献について」は、日本の教科書編纂の技術を中国に伝え、中国で呉昌碩等との交流によって体得した最新の文人趣味を伝えたという文化的貢献と、書画文墨趣味ネットワークを形成し、ボストン美術館鑑査委員として日中米国際交流を現出したという社会的貢献を述べた。続いて木村淳「明治期漢文教育における長尾雨山」は、教科書検定時の雨山の判断基準が文部省の定めた中学校漢文教育の方向性とは異なることを紹介した。登壇者の提言の後、会場も含めたディスカッションでは長尾雨山の漢詩、日本の漢学や教育をめぐって議論が交わされた。最後は2日全体の総合司会を務めた菅野智明氏により、長尾雨山の多領域にわたる活動について総括がなされた。

3日のエクスカージョンは京都市内の今出川駅付近の富岡鉄斎邸跡に集合後、近隣の佐伯病院跡、山本竟山邸跡、長尾雨山邸跡、江上瓊山邸跡、長尾雨山邸跡(終焉の地)をまわった。佐伯病院跡では、隣接する清和キリスト教会の佐伯理一郎院長を知る方から、当時の貴重なお話をうかがうこともできた。午後は八坂神社前に集合の後、長楽寺の鄭孝胥・長尾雨山揮毫碑、左阿彌、也阿弥跡を参観し、最後に吉田神社墓葬地の雨山墓所を参詣した。エクスカージョンは雨山の人的交流や儒者として

の精神を文献資料とは異なる視点から理解する一助になったものと思われる。

本会は諸領域の横断的な研究の推進を目標に発足した。今大会は長尾雨山の活動に対する複数の側面からの検討によって、分野横断的な研究の有効性、必要性を訴えることもテーマの一つであった。それがどの程度実現できたかは心許ないが、今後の大会も参加者の方々にも有益な情報や相互の交流の場を提供できるように努めていきたい。

なお、本文中の写真はすべて佐々木佑記氏(台東区立書道博物館)の撮影である。また、基調講演、研究報告の一部、エクスカージョンの詳細については会誌『中国近現代文化研究』第19号(2018年3月刊行予定)を参照されたい。

最後に、大会の開催、進行にご協力いただいた大阪市立美術館のスタッフの方々、参加して下さった方々に感謝を申し上げます。



基調講演の様子



鄭孝胥・長尾雨山揮毫碑にて

国内学会消息 (平成29年)

●北海道大学中国語・中国文学談話會

第252回 (2月18日)

- ・女神になった女將たち—楊家將小説と女性像 須々田晴子

第253回 (3月18日)

- ・漢語文法史研究の諸問題 松江 崇

第254回 (4月22日)

- ・探偵は社会秩序を回復し得るか—清末探偵小説『鴉片案』を読む 藤井 得弘

第255回 (5月27日)

- ・中国(漢族)をめぐる異国(異族)の言語と文字 中野美代子

第256回 (8月10日) 中華圏の都市と文学

- ・[臺南] 臺灣の古都に咲いた日本語文学 大東 和重
- ・[青島] 近代文化空間としての海濱リゾート都市 杉村安幾子
- ・[シンガポール] 高層階の誘惑 及川 茜

刊行物

『饕餮』第25号 (9月)

『火輪』第38号 (10月)

『連環畫研究』第6号 (2月)

(藤井 得弘 記)

●北海道中国哲学會

○例会

7月7日

- ・林鶯峰『論語集注私考』について 關 雅泉

10月27日

- ・卒業論文構想発表會 加藤 智彦
服部翔太郎

平成30年1月24日

- ・木村正辭の萬葉集研究と清朝考證學 金原 泰介

○研究発表大會

第四十七回研究発表大會竝總會

(9月13日 於北海道大学人文・社会科学総合教育研究棟 W308室)

- ・廖平の今古學と『穀梁傳』研究 吉田 勉
- ・横井小楠における西洋知識の受容について 田海 秀穂
- ・伊藤東涯の易學について—ト筮と義理 廖 海華
- ・呂大臨思想再考 山際 明利
(和田 敬典 記)

●東北中国学会

5月27、28日 第66回大会 於弘前大学

第一日

- ・司空図の詩作における「狂」—「狂題十八首」を中心に— 大山 岩根
- ・楚の江東進出と春申君—項羽の率いた江東の子弟八千人との関わりから— 太田麻衣子

[公開講演]

北宋の陳舜兪撰『廬山記』五巻の獨創性と其の価値

—香炉峰瀑布と醉石の詩跡研究を含めて— 植木 久行

第二日(中国思想・中国文学研究分野のみ抜粋)

- ・始祖伝説としての「太公望」 佐藤 信弥
- ・王延寿「魯靈光殿賦」における躍動と停滞 木村真理子
- ・温庭筠《商山早行》の景物表現について—「鷄」「鳧雁」を中心に— 鈴木 政光
- ・明代詩の新生面—楊慎の古楽府を中心に— 笹 浩樹
- ・東アジア文化圏における儒教とイスラーム—日本「古学」と「回儒学」の関係及び比較研究 阿里木托和提
(齋藤 智寛 記)

●東北シナ学会 (中国思想・中国文学分野のみ抜粋)

◎二月例会 (2月23日)

[卒業論文発表會]

- ・三好 桃子「李賀の寒冷表現について」
- ・相原 貴次「李卓吾思想研究—性命探討の行方」

〔修士論文発表会〕

- ・謝 廖科「秦漢文献における「音」と「聲」の使い分けについて——文字の成立と用法を中心に」
- ・堤 薫「前漢儒家思想研究——陸賈『新語』を中心として」
- ・木村真理子「王延寿研究」

◎四月例会（平成29年4月22日）

〔新入生歓迎会・講演〕

- ・三浦 秀一「舜の「憂喜」をめぐる解釈の展開とその思想史的意味」

(尾崎順一郎・田島 花野 記)

●東北大学中国哲学読書会

◎第186回中哲読書会（平成29年3月3日）

〔講演会〕

- ・陳 蘇民「朱舜水的教育思想及其在日本的傳播」

◎第187回中哲読書会（平成29年7月29日）

〔研究発表会〕

- ・尾崎順一郎「清代以前における古文尚書の弁偽について」

◎第188回中哲読書会（平成29年10月4日）

〔研究発表会〕

- ・豊島ゆう子「『明儒学案』に対する明代思想研究からの評価・批判」

(尾崎順一郎 記)

●東北大学中国文学談話会

第1回中国文学談話会 4月4日

〔卒業論文雑誌会〕

- ・下定雅弘氏『白居易と柳宗元 混迷の世に生の賛歌を』について 工藤龍太郎

第2回中国文学談話会 5月23日

〔卒業論文構想発表会〕

- ・白居易と科学 工藤龍太郎

第3回中国文学談話会 10月31日

〔卒業論文中間発表会〕

- ・白居易詩文における科学 工藤龍太郎

(田島 花野 記)

●秋田中国学会

○平成29年度春季秋田中国学会第164回例会

5月20日(土)於秋田大学教育文化学部3号館2階3-254教室

- ・隋唐長安の形成過程をめぐる近年の成果と課題

内田 昌功

- ・ロシア知識人の中国認識：中国不信の制約のなかで

中村 裕

○平成29年度秋季秋田中国学会第165回例会

11月25日(土)於秋田大学総合研究棟1階多目的共用講義室

- ・中国における製紙事情

軽部 俊一

- ・『原左氏傳』の著作意図と「民之主」の時代 吉永慎二郎

(羽田 朝子 記)

●筑波中国学会

○例会

5月18日(木)

- ・劉禹錫の連州左遷時までの詩作態度の変化 荒川 悠

6月8日(木)

- ・蘇詩趙次公佚注について

王 連旺

7月13日(木)

- ・晩年における劉禹錫の自己意識

荒川 悠

11月17日(木)

- ・阮瑀詩について

村越 充朗

12月14日(木)

- ・阮籍「詠懷詩」における「木槿」

村越 充朗

12月15日(木)

- ・『燕遼游記』所収柯劭忞・胡玉縉・楊鍾羲の資料について

王 連旺

○刊行物

『筑波中国文化論叢』第36号(10月)

(稀代麻也子 記)

●中国文学学会

○大会 6月24日 早稲田大学

[研究発表]

- ・宣教師から見た「祭」—フランソワ・ノエル『中国哲学三論』「第二論文」を中心に— 竹中 淳
- ・唐代の論書詩における書体観 剣持 翔伍
- ・夔州期における杜甫の詩作について 樋口 泰裕
- ・章学誠(文史校讎之学)における経書の位置 渡邊 大
- ・李商隱の詩歌の創作に対する杜甫詩の影響 加固理一郎
- ・日本時代の台湾における公学校漢文教育—書き言葉近代化への道のり 樋口 靖

[講演]

- ・『日本国見在書目録』の基軸—その編纂過程をめぐって— 高橋 均

○例会

3月11日 大妻女子大学

- ・杜甫と「説」 谷口 匡

9月16日 大妻女子大学

- ・上海常設映画館の誕生とその後—なぜ、そこだったのか 白井 啓介

12月9日 大妻女子大学

- ・西冷印社創始者の印学観とその位置 正岡 知晃
(内山 直樹 記)

●六朝学会

○例会

○3月17日(金) 第34回研究例会 於 京都外国語大学

[報告]

- ・郊廟歌辞について 鄭 月超
- ・宮廷場域與漢魏六朝才媛の文學活動 沈 凡玉
- ・北魏における射の諸相 藤井 律之

○12月2日(土) 第35回研究例会 於 二松學舎大学

[報告]

- ・王延寿「魯靈光殿賦」における彫刻描写 木村真理子
- ・南朝齊梁「率爾」詩考 大村 和人
- ・「史」の文学性—范曄の『後漢書』 渡邊 義浩

○大会

○6月17日(土) 第21回大会 於 二松學舎大学

[報告]

- ・徐幹の賢人論—「名実論」を媒介として— 長谷川隆一
- ・湯僧濟「詠渌井得金釵」の問題点 山崎 藍
- ・「幽通賦」諸注釈より見る後漢初期の賦創作について
- ・体系への憧れ—沈約が希求したもの 稀代麻也子
- ・六朝期の詩歌認識について—「詩」と「歌」の間— 佐藤 大志
- ・達意の為の仮構—『文選』卷四十五に載せる設論三篇をめぐって— 牧角 悦子
- ・杜甫における陶淵明 下定 雅弘
- ・謝靈運と廬陵王劉義真 大上 正美

○刊行物

『六朝学会会報』第18集(3月)

(大村 和人 記)

●お茶の水女子大学中国文学会

2017年度 活動報告

○大会 4月22日(土)

- ・談話機能から見る中国語における文末助詞“吗”と“呢”の比較 伊藤さとみ
- ・現代文学におけるタクシー運転手の表象について 宮尾 正樹

○7月例会 7月1日(土)

- ・六朝文学における「山」—遊仙詩を中心として— 董 子華
- ・「V“得”NP・VP」文における“得”の後ろの統語構造について 鄧 翔心
- ・沈從文と「文学啓蒙」 黄 唯

○9月例会 9月2日(土)

- ・顔茂猷著『廸吉録』に対する中江藤樹の「借用」について—説話同士の比較検討を中心に— 董 航
- ・漱石文学における「縹緲」—『虞美人草』の「縹緲のあなた」について— 胡 穎芝

○12月例会 12月2日(土)

- ・物語における語りの技法—「等待」・「少年池上」を例として 迫田 博子
- ・現代汉语動詞的隱現 田 禾
- ・可能表現のメカニズム—“能”と“會”を中心に— 安本 真弓
(竹野 洋子 記)

●國學院大學中國學會

○中國學會例会

第212回例会(1月7日)

- ・本学所蔵本『孔子通紀』について 青木 洋司
- ・国民革命前後のアメリカ留学派遣 牧野 格子

第213回例会(10月28日)

- ・楚辭「歌」について—「誦」と「倡(唱)」をめぐる— 早田ひかり
- ・王應麟『困學紀聞』における『易經』解釈について 齋藤 成治
- ・郁達夫『文学概説』について—有島武郎『生活と文学』との比較を中心に— 大久保洋子

○中國學會大会

第60回大会

[公開講演](6月17日)

- ・漢籍目録作成あれこれ 高山 節也

[研究発表](6月18日)

- ・中晩唐期における李賀詩の讀者と編集者 陸 穎瑤
- ・後漢・馮衍「顯志賦」について 宮内 克浩
- ・『山鹿語類』聖學篇の形成と『性理大全』 王 起
- ・口承三國志の研究 關索・鮑三娘を例として 立石 展大
- ・招魂・鎮魂固魄等について—道藏所収の資料から— 浅野 春二

○研究会

漢代文学研究会(毎週月曜日)—『漢紀』を読む—

宮内 克浩

唐代文学研究会(毎週火曜日)—唐詩を読む—

赤井 益久

川合 康三

宋代文学研究会(毎週木曜日)—『蘇軾全集校注』尺牘を読む— 石本 道明

中国礼俗文化研究会(毎週金曜日)—『開通冥路科儀』を読む— 浅野 春二

○中國學會奨励賞表彰(3月19日)

田中 沙織「ウイグル族の生活文化と恋愛—男女の価値観の相違を中心に—」(卒業論文)

○刊行物

學會誌『國學院大學中國學會報』第63輯

機関誌『崑崙』217号~219号

(青木 洋司 記)

●国士館大学漢学会

◎第52回大会(12月22日)於5302教室

[留学生帰朝報告]

・台湾国立中山大学 浦 琴絵

[卒業論文発表]

・朱熹『中庸章句』研究 藤本りえみ

・良寛研究—『草堂集貫華』を中心に— 川崎 美香

・中国の厠(トイレ)の歴史 飛井 大輝

[研究発表]

・朱熹『小学』と孝子譚 松野 敏之

[特別講演]

・郭沫若と近代医学 藤田 梨那

◎刊行物

・『国士館大学漢學紀要』第19号

(鷲野 正明 記)

●早稲田大学東洋哲学会

◎第三十四回大会

平成29年6月10日(土) 於早稲田大学文学学術院第一会議室

○研究発表

・水の精考—『今昔物語集』卷二十七第五話「冷泉院水精成人形被捕語」と類話を中心に— 崔 鵬偉

・范曄『後漢書』の「党人」評価と六朝時代の「史」 袴田 郁一

・伊藤仁斎における「誠」と「修為」 益田 貴裕

- ・智顛の教学における病行について 日比 宣仁
- ・中世曹洞宗における五位説の始源について
マルタ・サンヴィド
- ・王安石における無為の思想 梶田 祥嗣
- ・『列女伝』研究序説—中国近世における流布と受容を中心—
仙石 知子
- ・縁起性に基づく無自性論証成立の思想的背景に関する一考察 佐藤 晃

○講演

- ・『老子』の思想的特質 蜂屋 邦夫

○刊行物

『東洋の思想と宗教』第三十四号（平成29年3月25日発行）
（江波戸 互 記）

●日本漢詩文学会

<https://nihonkanshibun.jimdo.com/>

○第9回例会（3月4日 於・共立女子大学）

- ・ギター演奏 R・ロジャース作曲、A・コスタル編曲、
香焼志保再編「エーデルワイス」（映画「サウンド・オブ・ミュージック」より） 香焼 志保
- ・向田邦子のエッセイ『父の詫び状』について 石川 美穂
- ・鞦韆詩の系譜とその英訳（続） ガイ・ホップス
- ・謡曲「鶴亀」キリ 中嶋 諒
- ・近世における公家と丁祭 橋本 佐保
- ・菅原道真の応酬詩について 中村 昌彦
- ・伊福部隆彦の『老子』解釈について（続） 林口 春次

○第10回例会（9月2日 於・共立女子大学）

- ・ピアノ演奏 W・A・モーツァルト作曲、ファジル・サイ
編曲「トルコ行進曲」（ジャズバージョン） 山本麻由佳
- ・日本映画の題名の中国語訳について 粟野 友絵
- ・日独文化構造比較の試み 貫 成人
- ・台湾における日本マンガ・アニメ文化の受容—文化解釈の側面から 川田 健
- ・海外旅行における言語 中林 良弘
- ・伊福部隆彦の『老子』解釈について（三） 林口 春次

○活動

- ・史跡探訪

3月5日 於・向島百花園、白髭神社、弘福寺、牛島神社、三囲神社

○刊行物

- ・『日本漢詩文学会会報』第3号（7月）
- ・『日本漢詩文学会会報』第4号（12月）
（松野 敏之 記）

●日本聞一多学会

○大会

日時：2017年7月22日（土） 13：00 ～

場所：二松學舎大学九段キャンパス1号館11階会議室
研究発表

第一部：「聞一多と同時代の文化人」

- ・李 乐平「中国新詩自由、格律和象徴的集大成者—
—聞一多与中国現代詩家比較研究」
- ・小林 基起「日本の『中国文学研究—月報』に見る周
氏兄弟」（『中国現代文学研究叢刊』2016年度優秀論
文賞受賞）について

- ・王 桂妹「潮流内外：聞一多、老舍与“五四”」
- ・鄧 捷「いかに書くかをめぐる聞一多と魯迅」

第一部討論

第二部：「聞一多と古典（学術）」

- ・野村 英登「数式と文学—郭沫若と夏目漱石の文学
論について」
- ・吳 艳「聞一多古典文学研究特点及当下价值」
- ・刘 殿祥「聞一多的古典学术研究与“清华学派”」
- ・牧角 悦子「聞一多『周易義証類纂』について」

第二部討論

○刊行物

『神話と詩』第15号（2017年3月）
（野村 英登 記）

●日本詞曲學會

○詞籍「提要」譯注検討會

6月17日（土）、18日（日） 於立命館大學文學部中國文
學專攻共同研究室

『四庫全書總目提要』「詞曲類」の譯注および検討

◎『唐宋名家詞選』譯注検討會

3月5日(日)、6日(月)、7日(火) 於日本大學商學部本館3階共同研究スペース

8月18日(金)、19日(土)、20日(日) 於日本大學商學部本館3階共同研究スペース

12月2日(土)、3日(日) 於愛知大學名古屋キャンパス
龍榆生編『唐宋名家詞選』の譯注および検討

◎小風絮會(『唐宋名家詞選』譯注)

1月28日(土)、2月18日(土)、5月7日(日)、6月3日(土)、7月8日(土)、9月9日(土)、10月21日(土)、11月11日(土)
於立命館大學文學部中國文學專攻共同研究室
龍榆生編『唐宋名家詞選』の譯注および検討

◎刊行物

『風絮』別冊 龍榆生編選『唐宋名家詞選』北宋編(一)(3月)
『風絮』第十四號(12月)
(池田 智幸 記)

●日本宋代文学学会

第四回大会

2017年5月27日(土) 岡山大学創立五十周年記念館

○発表

- ・幕末・明治における唐宋古文—藤森弘庵『東坡策』を中心に 黄 小珠
- ・南宋中興期における蘇軾—陸游と范成大の場合— 坂井多穂子
- ・宋自遜的家世、生平與交游、創作考論 熊 海英
- ・今日から見た陳衍の『宋詩精華錄』—同書出版80年に際して— 三野 豊浩
- ・宋代詩經学における詩篇の内容の重層的把握の發展、および詩序の意義 種村 和史

○シンポジウム「編纂と伝承—宋人文集をめぐる—」

- ・『夷堅志』後十志の伝承—上海図書館黄丕烈校鈔本『夷堅志』について— 潘 超
- ・南宋本『歐陽文忠公集』に見られる「続添」について 東 英寿
- ・蘇軾文集の編纂と尺牘 浅見 洋二

JSPS 科研費「宋人文集の編纂と伝承に関する総合的研究」班共催

○総会

(浅見 洋二 記)

●中唐文学会

平成29年度大会

10月6日(金) 於山形大学

- ・敬亭山の印象—謝朓から李白へ 石 碩
 - ・宋之間『明河篇』と初唐の公主たち 種村由季子
 - ・「浮」かんでいるもの—杜甫「登岳陽樓」における「乾坤日夜浮」の解釈をめぐる 大橋 賢一
- 講演

- ・唐代伝奇「鶯鶯伝」の反復される表現—人物の思いをいかに読み取るか 葉山 恭江 (三上 英司 記)

●名古屋大学中国哲学研究会

○研究会

第87回研究会(5月8日)

[卒業論文構想発表]

- ・鬼門について 大神 奈穂
- ・北宋以降の内丹道における「性功」の扱いの変容について 藤野 光雄

第88回研究会(8月23日)

[[『名古屋大学中国哲学論集』第十六号合評会]

- ・論評：張名揚「宗教思想史に見る仙薬としての茶」 李 錡
- ・論評：李麗「陳元賛の有無観—『老子経通考』にみえる林希逸『老子虞齋口義』の批判を中心に—」 石丸 羽菜

第89回研究会(9月20日)

[研究発表]

- ・清原家『孝経』抄物について 石丸 羽菜

第90回研究会(10月16日)

[卒業論文中間発表]

- ・王充の『鬼』について 大神 奈穂

○刊行物

『名古屋大学中国哲学論集』第16号(5月25日)

(小崎 智則 記)

●京都大学中国文学会

○第32回例会

7月22日(土) 於京都大学文学研究科第3講義室

- ・六言詩の韻律について一日中詩話を中心に 蕭 振豪
- ・「詩界革命」再考—黄遵憲・梁啓超と明治漢詩の関わり 蔡 毅
- ・『文選』をめぐる 川合 康三

○講演会

2月14日(火) 於京都大学文学研究科第4講義室

座談会：東アジア漢文学研究の現在と未来

第一部「修論発表」

- ・高橋和巳と《文心雕龍》研究 黄 詩琦
- ・公安三袁、周作人関係論再探 趙 偵宇

第二部「講演及び座談会」

- ・新材料・新問題・新方法—談東亞漢文学研究 張 伯偉
- ・中国辞賦と東亞漢文学 曹 虹
- ・高麗朴寅亮の北宋使行と“小中華”意識 鄭 培謨

6月4日(日) 於京都大学文学研究科第4講義室

- ・《太子須大拏經》校読札記 方 一新
- ・《騎著一匹》と東北方言札記 王 雲路

○ワークショップ

3月14日(火)~18日(土) 於香港城市大学中文及歴史学系
第五届復旦大学—京都大学—香港城市大学東亞人文研究研討会

○刊行物

『中国文学報』第88冊 (2016年10月付)

『中国文学報』第89冊 (2017年10月付)

(緑川 英樹 記)

●中國藝文研究會

○合評會及び研究会

1月29日(日) 研究会 (末川記念會館第二會議室)

- ・盛唐の邊塞詩における望郷の詩について 田中 京
- ・詹駉について 靳 春雨
- ・劉弘毅與《少微通鑑》 金 菊園

3月26日(日) 合評會・研究会 (末川記念會館第二會議室)

- ・漢簡『反淫』にみえる道家思想について 村田 進
- ・江淹の「效阮公詩」について 今場 正美
- ・明代白話小説「蘇知縣羅衫再合」の關連作品について 廣澤 裕介
- ・梁德繩續補《再生綠全傳》説獻疑 金 菊園

7月22日(日) 合評會・研究会 (立命館大學敬學館三三二教室)

- ・銀雀山漢墓竹簡「地典」譯注補 石井眞美子
- ・『列仙傳』と『神仙傳』の中の仙人像 宮本 紗代
- ・鶡軒文庫所藏「森川竹磎詩稿」について 萩原 正樹

10月15日(日) 研究会 (末川記念會館第二會議室)

- ・高適の邊塞詩一封丘尉の職を辭すまでの邊塞詩 高適の薊北の地での邊塞詩の特徴はどうして形成されたか 田中 京
- ・『白氏文公年譜』所收の「舊譜」について 富 嘉吟
- ・『和晏叔原小山樂府』をめぐる 萩原 正樹

○刊行物

『詞譜』及び森川竹磎に關する研究』(萩原正樹著 3月)

『學林』第六十四號 (3月)

『學林』第六十五號 (11月)

(山内 貴記)

●東山之會

○研究發表 於京都女子大學

2月18日

- ・『淮南子』に見える經典化への志向について 鈴木 達明

3月25日

- ・二〇一六國家人文社會科學基金項目「歷代柳宗元研究 文獻整理及數據庫建設」選題與構想 翟 滿桂
- ・「永州八記」千年覚—柳宗元山水文章の現代追求— 蔡 自新

- ・日本學者對柳宗元研究的拓展與掘進—以清水茂・下定 雅弘・戸崎哲彦爲例— 呂 國康

- ・柳宗元與永州山水相關圖片和解説 翟 滿桂・蔡 自新・呂 國康

4月22日

・月性と漢詩 愛甲 弘志

6月17日

・韓愈の「短燈檠歌」について 東 聖悟

7月29日

・士人描寫詩論の可能性—李頎の士人描寫詩を中心に—
川口 喜治

9月30日

・『詩學大成抄』をめぐって 松尾 肇子

11月25日

・宋詞は如何成爲經典的—以梅溪詞在雍正・乾隆詞壇的
接受爲例— 曹 明升

12月16日

・馬融「長笛賦」論再考 上原 尉暢

○『長江集』譯註（2月18日至月12月16日）

卷三「送覺興上人歸中條山兼謁河中李司空」至「送路」
（愛甲 弘志 記）

●阪神中哲談話会

○第401回特別発表大会 2016年9月3日 於関西大学

第一部：「阪哲評書」 総合司会 古勝 隆一

・基調報告：関西大学・文化交渉学専攻・中国哲学関連
の博士論文と出版について 吾妻 重二

・『西周期における祭祀儀礼の研究』
著者：佐藤 信弥／評者：水野 卓

・『近百年來日本學者《三禮》之研究』
著者：工藤 卓司／評者：池田 恭哉

・『性善説の誕生』著者：末永 高康／評者：内山 直樹

・『荀學與荀子思想研究：評析・前景・構想』
著者：佐藤 将之／評者：井ノ口哲也

・M. ピュエット『ハーバードの人生が変わる東洋哲学』
評者：佐藤 将之

第二部：「中国古代觀念史」研究発表

・前漢初期知識人における「秦」叙述 工藤 卓司

・戦国法家「聖人」和「明主」関係演變変化探析—「上明
下聖」概念的發展 青山 大介

・中国古代「情」觀念と感情の思想 橋本 昭典

・中国古代における主宰としての「天」 菅本 大二

・戦国早中期「忠」与「忠信」概念的展開 佐藤 将之

○第402回例会 2017年11月18日 於大阪芸術大学短期
大学部

第一部：「阪哲評書」 全体司会：奈良 行博

・『復元 白沢図：古代中国の妖怪と辟邪文化』
著者：佐々木 聡／評者：多田 伊織

・『易、風水、曆、養生、処世 東アジアの宇宙観（コス
モロジー）』 著者：水野 杏紀／評者：佐藤 実

・『台湾道教における齋儀—その源流と展開』
著者：山田 明広／評者：酒井 規史

・総合コメント：坂出 祥伸

第二部：「研究発表」

班固「典引」「兩都賦」における天人論の特色
南部 英彦
（橋本 昭典 記）

昨年号にて編集の不幸により、2016年の消息
を掲載できませんでした。ここに詫言びして併記
します。 （出版委員会）

●大阪大学中国学会

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/chutetsu/xuehui/index.htm>

（事務局は大阪大学文学研究科中国哲学研究室）

○講演会

2017年12月2日、大阪大学文学部

・西村天囚関係資料調査報告—種子島に残る天囚の貴重
資料— 湯浅 邦弘

・西村家所蔵資料と懷徳堂—「故西村博士記念会会務報
告」・写真類を中心として— 竹田 健二

○刊行物

『中国研究集刊』第63号 [果号]（6月）特集「儒学—蜀
学と文献学」

（湯浅 邦弘 記）

●懷徳堂研究会

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/~kaitoku-s/index.html>

(事務局は大阪大学文学研究科中国哲学研究室)

○研究会合

第26回研究会 3月25日 大阪大学文学部中庭会議室

- ・五井蘭洲『茗話』の写本の存在について 湯城 吉信
- ・孝行譚の和様化と『とはずがたり』 佐野 大介
- ・懷徳堂における漢作文と達意と一徂徠学派との比較を通じて— 黒田 秀教
- ・並河寒泉の蕉園詩文集編纂 寺門日出男
- ・明治期大阪の儒学振興と懷徳堂と 矢羽野隆男
- ・中井木菟麻呂が受け継いだ懷徳堂の遺書遺物—小笠原家に預けられたものを中心に— 竹田 健二

第27回研究会 12月3日 大阪大学文学部中庭会議室

- ・講演「西村天因の近代漢学における意義について」 町 泉寿郎
- ・五井蘭洲の「敬」論 佐藤 由隆
- ・日本近世における相對的視座の思考様式—懷徳堂の徂徠批判を手掛かりとして— 黒田 秀教
- ・並河蛋街(寒泉の子)の受けた漢文学習—『復文草稿』『課蒙』寒泉・蛋街の復文資料 湯城 吉信 (湯浅 邦弘 記)

●中国出土文献研究会

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/chutetsu/sokankenkyukai/index.html>

(事務局は大阪大学文学研究科中国哲学研究室)

○研究会合

第65回研究会 7月15日・16日 大阪大学中国哲学資料室

- ・銀雀山漢簡『天地八風五行客主五音之居』八風占の理論とその変遷について 椛島 雅弘
- ・清華大学竹簡『管仲』について 湯浅 邦弘
- ・時令説の展開 湯浅 邦弘
- ・北大漢簡『儒家説叢』について 中村 未来
- ・清華簡『越公其事』釈読 竹田 健二

第66回研究会 特別講演会「竹簡学の現状と展望」

7月16日 大阪大学文学部大会議室

- ・安徽大学蔵戦国竹簡について 草野 友子
- ・清華大学蔵戦国竹簡(壹—柒)の字迹分類 福田 哲之

○国際学術交流

5月14日

第9回東アジア文化交渉学会(於北京外国語大学)に湯浅邦弘、草野友子、曹方向が参加した。

10月10日～11日

武漢大学で開催された国際学会「中国簡帛學國際論壇2017・新出土戰國秦漢簡牘研」に湯浅邦弘、竹田健二、草野友子が出席。

- ・時令説的展開—北大漢簡《陰陽家言》與銀雀山漢簡“陰陽時令、占候之類”— 湯浅 邦弘
- ・北大漢簡《周訓》所引《詩》的思想史研究 草野 友子

○刊行物

『竹簡学—中国古代思想的探究』(湯浅邦弘著・白雨田訳、中国出版集團東方出版中心、2017年1月)
 『清華簡研究』(湯浅邦弘編著、汲古書院、2017年9月)
 (湯浅 邦弘 記)

●中国中世文学会

○平成29年度研究大会

10月28日 於広島大学文学研究科

- ・志怪小説と『世説新語』劉孝標注をめぐる 高西 成介
- ・六朝・唐代医術小説研究序説 屋敷 信晴
- ・李白古楽府の創作と文集編纂考述 任 雅芳
- ・西湖修禊詩—詩会の記録という観点から— 市瀬 信子 [講演]

新見唐代碑志の価値と意義：以両方回紇志、李百薬志等為重点的討論 李 浩

○例会 於広島大学文学研究科

1月26日

- ・『西廂記』と八股文について—唐六如先生才子文を中心に— 樊 可人

2月9日

- ・宋初古文家の「平易」への志向—孫沖「重刊絳守居園池記序」を手がかりに— 渡部 雄之

5月11日

- ・梅堯臣の日常詠—謝景初との詩作を中心に— 大井 さき
- ・宋初平易派古文家と「怪奇」な古文—孫沖「重刊絳守居園池記序」を中心に— 渡部 雄之

6月15日

- ・女功と漢詩—『紅蘭小集』の編纂背景について— 錢 心怡
- ・謝朓詩研究—六朝詩中の竹について— 劉 雅婧
- ・雪嶺永瑾『杜詩抄』の研究—歌行詩を中心に— 高橋 武
- ・元稹傷悼詩の研究 黃 夕子

7月13日

- ・『新編醉翁談録』の成立背景 孟 夏
- ・遠山荷塘の『嫦娥清韻』について 樊 可人

9月20日

- ・広島大学所蔵の和刻本文選をめぐって 陳 獅
- ・広島大学所蔵和刻本文選の文献価値 劉 志偉
- ・海外所蔵貴重古典文献の影印出版の必要性について 姜 建設
- ・魏文成皇帝嬪耿氏墓誌銘考論 劉 迪
- ・張衡都城賦之文学地理研究 李 小白

12月7日

- ・謝朓詩研究—謝朓の詠物詩と沈約の詠物詩の比較— 劉 雅婧
- ・『棟亭集』と『紅樓夢』の詩詞について—菊の詩を中心に— 陳 雲鵬

12月14日

- ・史伝からの脱却—柳宗元の「伝」に関する研究— 許 培俊
- ・『新編分類夷堅志』研究 施 金曉
- ・『杜詩抄』歌行詩の五山注について—『心華臆断』を中心に— 高橋 武

○刊行物

- 『中国中世文学研究』第69号（3月）
- 『中国中世文学研究』第70号（9月）

（川島 優子 記）

●広島大学中国文学研究室研究会

○第200回 2月10日

[卒業論文最終発表会]

- ・何遜の詩について 藤田 早紀
- ・『水滸伝』の入回詩 金平 侑子
- [卒業論文構想発表会]
- ・『夷堅志』における科挙に関する夢の物語 施 金曉

○第201回 5月29日

[学会事前発表会]

- ・梅堯臣の日常詠—謝景初との詩作を中心に— 大井 さき

○第202回 6月26日

[修士論文中間発表会]

- ・女功と漢詩—『紅蘭小集』の編纂背景について— 錢 心怡
- [修士論文構想発表会]
- ・謝朓詩研究—六朝詩中の竹について— 劉 雅婧
- ・元稹傷悼詩の研究 黃 夕子
- ・雪嶺永瑾『杜詩抄』の研究—歌行詩を中心に— 高橋 武

○第203回 7月24日

[卒業論文最終発表会]

- ・『夷堅志』における科挙に関する夢の物語 施 金曉
- [卒業論文構想発表会]
- ・「白蛇伝」における青青像の変遷 大西 紀衣
- ・柳如是の詩について 鄭 沛文
- ・『通俗西遊記』『絵本西遊記』の翻訳、改訳について 道下 京

○第204回 11月28日

[卒業論文中間発表会]

- ・「白蛇伝」における青青像について—蛇女と人間の異類婚姻譚を中心に— 大西 紀衣

・『西遊記』の翻訳、改訳について—『通俗西遊記』『絵本西遊記』の特徴— 道下 京

○第205回 12月22日

[修士論文中間発表会]

・謝朓詩研究—謝朓の詠物詩と沈約の詠物詩の比較— 劉 雅婧

・『棟亭集』と『紅樓夢』の詩詞について—菊の詩を中心に— 陳 雲鵬

・『杜詩抄』歌行詩の五山注について—『心華臆断』を中心に— 高橋 武

[修士論文構想発表会]

・史伝からの脱却—柳宗元の「伝」に関する研究— 許 培俊

・『新編分類夷堅志』研究 施 金曉

・清莫友芝『唐写本説文解字木部箋異』の訳注 鶴原 勝

○刊行物

『中国学研究論集』第35号(4月)

(川島 優子 記)

●広島大学中国思想文化学研究室研究会

第198回研究会 2月14日

[卒業論文発表会]

・室鳩巢思想の研究—加賀藩時代を中心に— 太田 若葉

[修士論文発表会]

・石田梅岩心学思想の研究—「心性ノ沙汰」「商人ノ道」を中心にして— 日下 理

第199回研究会 8月19日

[研究発表会]

・上海博物館蔵戦国楚竹書『恆先』の政治思想と宇宙生成論 熊 奕淞

・『荀爽九家集注』の注釈方法について 藤田 衛

・近代日本における陽明学と大塩平八郎 山村 奨

[講演会]

・明治後期の二つの孔子論 工藤 卓司

・先秦における「智者」の形象—「聖人」観念研究の

一環として

青山 大介

第200回研究会 10月31日

[卒業論文中間発表会]

・緯書における感生帝説 大竹晋太郎

・『日本書紀』出典研究—潤色に利用された「類書」考— 吉岡 祐馬

第201回研究会 12月14日

[卒業論文テーマ発表会]

・王充の鬼神解釈と残り続けた神秘性 山内 純季

・日本における医食 山本笑里花

○刊行物(発行人 東洋古典学研究会)

『東洋古典学研究』第43集(5月)

『東洋古典学研究』第44集(10月)

(有馬 卓也 記)

●山口中国学会

12月16日 於山口大学人文学部

・中国黔东南ミャオ族における櫛研究—台江県の事例を中心に— 郭 叡麒

・『日本館訳語』の見出し語に関する研究—『琉球館訳語』『朝鮮館訳語』との比較を通して 班 健

・『陸上』 攷 聶寧

・近代日本の中国語関係書の中での擬声語の位置づけについて 李 夫平

・王夫之『周易外伝』のいわゆる「道器論」について 齊藤 禎

(根ヶ山 徹 記)

●中国四国地区中国学会

6月3日 第63回大会 於山口大学

・上海博物館蔵戦国楚竹書『恆先』における「自生」、「自作」、「自為」について 熊 奕淞

・『易緯稽覽図』に見えたる卦気説について 藤田 衛

・鬼と交わる病気—「鬼交」の呪術治療からみる鬼払い 孫 瑾

・哲学研究としての「朱子」の可能性(II) 溝本 章治

・楊萬里「心學論」の思想 望月 勇希

- ・何遜詩に見る夕暮れの風景—江淹詩との比較を中心に—
佐伯 雅宣
- ・梅堯臣の日常詠—謝景初との詩作を中心に—
大井 さき
- ・宋初平易派古文家と「怪奇」な古文 —孫沖「重刊絳守居園池記序」を中心に—
渡部 雄之
(根ヶ山 徹 記)

●九州中国学会

5月13日・14日 第65回大会 佐賀大学

[研究発表]

- ・中晩唐期の文人における嗜好への意識 谷口 高志
- ・物語における外的視点と内的視点 劉 轟
- ・コーパスに基づく他動詞型結果構文の認知言語学的分析—“唱”を一例として 秋山 淳
- ・知音妙賞—論呉人對洪昇『長生殿傳奇』評點之意義 鍾 東
- ・『論語徴』に見る荻生徂徠の詩経観 張 文朝
- ・中国古代呪術系医療の一端—「驚」の予防を中心に— 有馬 卓也
- ・朱熹の『易学啓蒙』について 伊香賀 隆
- ・佐久間象山の「喪礼私説」について 韓 淑婷
- ・黄庭堅と竹 蒙 顕鵬
- ・莊周楚相招聘説話攷 檜崎洋一郎
- ・佐賀石刻漢文資料初探 野田 雄史
- ・徐霞客の地理・地学思想初探—地の「脈」を中心に— 薄井 俊二

[九州中国学会後援シンポジウム]

肥前鍋島家の文雅

刊行物

『九州中国学会報』第55巻（5月）

(秋吉 收 記)

●九州大学中国文学会

1月28日 第291回中国文藝座談会

- ・李白における長安—天宝初年を中心に— 孫 亜秋
- ・上海図書館所蔵黄丕烈校鈔本『夷堅志』について 潘 超
- ・亀井昭陽『楚辞珠』の現存する写本相互の関係について 野田 雄史

3月11日 第292回中国文藝座談会

- ・敦煌変文における「東西」の諸相 西山 猛
- ・内閣文庫蔵『重刻元本题評音釈西廂記』考 黄 冬柏
- ・『搜神記』における方土故事について 雁木 誠

4月8日 第293回中国文藝座談会

- ・唐代の女流詩人魚玄機の人物像 澤田 優子
- ・市河寛斎と中国唐宋の詩人達 岸本 美幸
- ・夏目漱石の執筆活動と漢詩 白本 茜
- ・茅盾の女性論について 木原 規衣
- ・郁達夫の「菖蘿行」における心理表現 渡邊 広子
- ・北宋詩における墨竹 蒙 顕鵬

7月29日 第294回中国文藝座談会

- ・電子教材「鴻門之会」開発報告
長谷川真史 栗山 雅央 種村由季子
- ・青龍寺という創造空間 ウィリアム・マツダ
- ・中国から見た日本古旧漢籍 —『集注文選』『白氏文集』を例に— 静永 健

9月9日 第295回中国文藝座談会

- ・陶淵明の農事詩について 王 源
- ・李白における鮑照 上ノ原怜那
- ・黄庭堅の墨竹創作論について 蒙 顕鵬
- ・国立公文書館・哈佛燕京図書館・仏国立図書館所蔵の『封神演義』版本について 岩崎華奈子

11月25日 第296回中国文藝座談会

- ・郭震「宝剑篇」と武則天の嵩山封禪 種村由季子
- ・宋代詩注の特徴について 甲斐 雄一
- ・九州大学文学部所蔵『支那小説戯曲版画集』編纂考 稲森 雅子
(井口 千雪 記)

委員会報告

【論文審査委員会報告】

委員長 大木 康

○学会報第70集応募論文の審査の経緯

2018年1月15日（消印有効）締め切りの応募論文は全33篇（哲学・思想部門12篇、文学・語学部門14篇、日本漢学部門7篇）であった。1月29日に論文審査委員会を開催し、論文1篇につき3名の査読委員（論文審査委員会委員1名を含む）を決めた。

3月25日開催の論文審査委員会で、査読委員3名の査読結果をもとに、哲学・思想部門5篇、文学・語学部門6篇、日本漢学部門3篇の計14篇の掲載を決めた。

「論文執筆要領」の改訂により、本第70集より、ワープロ入力による原稿が枚数の基準となった。規定枚数の明瞭化によって、より公平な審査が可能になったことを多とするが、なおも注の部分の字数を30字以上に設定し、結果として枚数超過と認められた原稿が1篇あったことは残念であった。本文・注ともに、30字×40行、18ページ以内なので、重ねて注意を喚起しておきたい。

○その他、3月25日の論文審査委員会での審議決定事項

- ・学会報第71集依頼論文執筆候補者（評議員2名、一般会員2名）を決定し、理事会に推薦することとした。
- ・哲学・思想部門、文学・語学部門から各1名の学会賞候補者を決定し、理事会に推薦することとした。
- ・「日本中國學會報論文執筆要領」の改訂につき審議した。出版委員会との相談を経た後、理事会にはかることとした。

【選挙管理委員会報告】

委員長 松原 朗

1. 評議員

下記三名の方が2018年3月31日に定年をもって評議員を退任されました。

堀池 信夫（関東地区）

後藤 秋正（北海道地区）

野間 文史（関東地区）

これに伴い、下記三名の方が前回評議員選挙の投票結果に基づき評議員に繰り上げ当選となりました。任期は2018年4月1日から2019年3月31日までとなります。

なおこの件は、昨年2017年10月8日の理事会において承認されております。

小路口 聡（関東地区）

萩原 正樹（近畿地区）

坂口 三樹（関東地区）

2. 平成31・32年度役員選挙

本年度（平成30年度）は役員選挙の年となります。その皮切りとしてまず本年6月9日（土）に評議員選挙の投票用紙の発送作業を行う予定です。ふるって投票されることをお願いいたします。

事務局より

◎評議員の一部交替について

2018年3月31日に評議員3名が評議員定年を迎えたため、下記のように2016年に実施された評議員選挙の結果に基づき3名の会員が繰り上げ当選となりました（任期は2018年4月1日から2019年3月31日まで）。

●退任の評議員

後藤秋正会員・野間文史会員・堀池信夫会員

●後任の評議員

坂口三樹会員・小路口聡会員・萩原正樹会員

◎研究推進・国際交流委員会委員の追加と同委員会幹事の交替について

理事会での審議を経て、好川聡会員を2018年2月11日付で研究推進・国際交流委員会委員に委嘱することとなりました。

また、同委員会の福谷彬幹事が3月31日付で退任し、陳佑真会員を4月1日付で同委員会幹事に委嘱することとなりました。

◎住所等の変更と会員名簿への掲載について

住所や所属機関の変更につきましては、速やかに事務局へお知らせください。特に学生会員の方が学生身分を喪失した場合には、必ずご連絡願います。電子メール、郵便、ファックス、あるいは会費納入時の振込用紙（ゆうちょ銀行払込取扱票）通信欄をご利用ください。

今年度10月発行の会員名簿には、8月末日までにお知らせいただいた会員情報を掲載いたします。それ以降の変更については次年度の掲載となりますので、ご了承ください。なお、以前は固定電話の番号（自宅または勤務先）のみを掲載しておりましたが、2013年度から携帯電話の番号も掲載できることといたしました。携帯番号を掲載することを希望される場合は、事務局までご一報願います（ご本人からのお申し出がない限り、既にご登録いただいている携帯番号を掲載することはありません）。

◎クレジットカードによる会費決済について

2017年度より、海外在住の会員を対象として、クレジットカードによる会費決済を開始しています。ご希望の方は、事務局まで電子メールでご連絡ください。折り返し、決済用ページのURLをお送りいたします。なお、利用可能ブランドはVISA・MASTERのみです。ご了承ください。

日本中国学会事務局

電子メール：info@nippon-chugoku-gakkai.org

郵便：〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25
斯文会館内

ファックス：03-3251-4853

ゆうちょ銀行振替口座

口座番号：00160-9-89927

加入者名：日本中国学会

訃報

前号発行以降、次の方のご逝去の報が届きました。
謹んでご冥福をお祈りいたします。（敬称略）

町田 三郎（九州地区）

2018年3月18日

第70回大会開催のお知らせと研究発表の募集

会員各位

陽春の候、会員各位におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、日本中国学会第70回大会は東京大学が準備を担当し、本年10月6日(土)、7日(日)の両日に東京大学駒場キャンパスにて開催することになりました。つきましては、下記の要領で研究発表を募集いたしますので、奮ってご応募くださいますようお願い申し上げます。

2018年4月吉日

日本中国学会第70回大会準備会代表
大木 康

記

1. 部 会 : 一、哲学・思想
二、文学・語学
三、日本漢文(日本漢学・日本漢詩文・漢文教育など)
四、パネルディスカッション(次世代シンポジウム)
2. 時 間 : 一～三は発表20分に質疑応答10分、四は報告、質疑応答含め全体で120分以内。
3. 締 切 : 6月30日(土)(当日消印有効。簡易書留、レターパック、EMS等追跡調査が可能な郵送手段でお願いします)
4. 応募方法 : 研究発表は、学術研究の最新の成果で、未発表かつ未公開のものに限ります。
一～三に応募される方は、氏名(フリガナ・所属)・希望発表部会・連絡先メールアドレスを明記の上、発表題目および概要(800字以内、日本語による)を、大会準備会まで郵送すると同時に、それらの電子ファイルをEメール(データ添付)により期日までに送付してください。Eメール受信時には自動返信します。期日(日本時間)までに電子ファイルが届いていない場合、応募を受理しないので、注意すること。
四に応募される場合は、パネルの代表者がパネリスト全員の氏名(フリガナ、所属、メールアドレスも明記のこと)、パネルの題目と概要(1,200字以内、日本語による)を、上記と同様の方法により、大会準備会に送付してください。なお、学会、研究会あるいは研究機関(研究室等)によって組織されたパネルも可とします。
※執筆者による校正はありませんので、完全原稿でお願いします。
5. 応募資格 : 研究発表の応募には、本学会会員資格が必要です。特に、四については、パネリスト全員の本学会会員資格が必要となります。新入会員の方は、応募申し込み締切日までに、会費の振り込みが必要となりますのでご注意ください。
6. 応募宛先 : 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
東京大学文学部中国語中国文学研究室 内
日本中国学会第70回大会準備会 宛
E-mail: japansinology70@gmail.com

◎本年は、一、哲学・思想 二、文学・語学 三、日本漢文、四、パネルディスカッションの四部会を予定しておりますが、応募状況によって調整することも考えております。各部会の発表は、質疑応答も含めて日本語でお願いします。なお、バランスも勘案の上、審査を行ない、やむを得ず発表をお断りすることもありますので、ご了承ください。

◎パネルディスカッションに年齢制限はありませんが、次世代を担う若手研究者からの応募が歓迎されます。またパネルの内容は、学会ホームページに「研究集録」として掲載される予定です。

◎大会当日、キャンパス内に託児室を開設する予定です。詳細は大会要項に記載いたします。

【問合せ先】 E-mail: japansinology70@gmail.com (大会準備会事務局)
TEL: 03-5841-3823 (中国語中国文学研究室)